

【平成18年度美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修】

2006年8月7日 15時半より

Fグループ ファシリテーター 三澤先生

○ファシリテーター自己紹介

三澤先生：先ほどの目黒第八中学校のトークの感想

○自己紹介とギャラリートークの感想

青木先生（栃木）：「ギャラリートークはこどもの話が膨らんでいくのがおもしろい。」

芹田先生（秋田）：「ひさびさの近美がなつかしい。ギャラリートークはこどもたちが本物に触れる、作品に共鳴するという意味でよい」

徳門先生（沖縄）：「沖縄に新しい美術館ができるので美術館利用について学びたい。ギャラリートークについては他人の見方がわかりおもしろい」

高橋先生（香川）：「地元でどのように貢献できるか考えたい。丸亀の美術館で鑑賞などを行っているが日常的な利用は行っていないので今後ひろげたい」

中南先生（徳島）：「ひさびさの近美がなつかしい」

嶋田先生（兵庫）：「本物の説得力。話す生徒も聞く生徒も真剣だった」

中村先生（千葉）：「千葉市で研究会もしているが教材研究が中心。学芸員と話し合い鑑賞についても考えている。ギャラリートークは参加したこどもにとって有意義。ひろげていきたい。」

小島先生（熊本）：「近美が好き。美術鑑賞の授業をどのようにやればよいのか迷っている。自由にやる、でいいのか。」

平田先生（岡山）：「県立美術館との連携で教材開発をしている。アートゲームを考えている。MITE!展に携わっている。ギャラリートークについても考えたい」

金井先生（神奈川）：「学校では受験のために美術の授業をがんばっているようで悲しい。美術館見学を行ったが美術館自体の場所が分からないなど、中学生に向けたPRが不足しているのかもしれない。こどもたちには本物を見て学んでほしい。ギャラリートークはこどもたちの言葉から学ぶことがあったので楽しかった」

彦根先生（神奈川）：「美術館に行ったことのある生徒が少ない。こどもたちにどのように美術館の作品をみせればよいのか学びたい。生徒にいかに意見をだしてもらうかを学びたい」

青木先生（群馬）：「日本画の美術館の学芸をしている。来館者の年齢層が高くこどもたちが来ないのが課題。ギャラリートークではこどもが素直に作品に向かい合う姿を見た」

川浪先生（福岡）：「県立美術館の学芸をしている。美術館の存在自体を問われている。子どもや教育、地域など新しい切り口や外の力が必要なのでは？先生も利用者も使えるような鑑賞教育を。ギャラリートークについてはこどもたちの反応と視線に学ぶものがあった。すべてこどもたちの見ることに重点が置かれるべきだと再確認した。」

池田先生（埼玉）：「埼玉近美の学芸をしている。最近まで博物館に勤務していた。博物館は学びに重点を置いていたが、美術館では鑑賞に重点をおいており、努力が必要だと確認した。ギャラリートークについては先生の問いかけでさまざまな意見が出る、引き出すことについての力量にかかっている。美術館では子どもたちの盛り上がった雰囲気壊すようなことが多いように感じている。」

上野先生（島根）：「県立美術館の学芸をしている。遠足での来館者が多い。希望があれば事前申し込みでガイドを行っている。」

佐藤先生（鳥取）：「教育センター勤務。元中学教員。鳥取には美術館がない。ギャラリートークでは三澤先生のこどもの答えを待つ間の大切さを学んだ。小学生と中学生の鑑賞の差を知った」

坂本先生（茨城）：「県庁教育課。県内に4館ある。入館者を増やすために特に子どもたちに来てもらえるように努力している。学校と館で求めるものが違っていることを痛感している。ギャラリートークについてはどのように学校で生かすか、美術館と学校が違い場合どうするのかを考えながら見ていた」

池田先生（兵庫）：「神戸市小磯記念美術館の学芸。明日の事例発表を行います。明日は来館できない学校と美術館をどのようにつないでいくのかを紹介したい。中学校と美術館をどのようにつないでいくのかを学ぶためにFグループに参加しました。ギャラリートークについては本物を見なければ分からないこと、細かい部分が大切だということに気がついた」

三澤先生：「今日のプログラムは誰がやってもできるプログラムにしたかった。こどもが緊張していたので急遽予定変更をした。こどもの選んだ作品の中からひとつをトークした。ギャラリートークについてはこどもによって感じ方など異なるのでこどもの顔を見てその場で変更していく必要があると考えている。《樹海》では子どもたちから引き出しているんな見方ができることに驚きがあった。」

## ○議論

### 1.鑑賞における知識の扱い

- ・美術作品鑑賞では作品の主題（歴史背景など）に迫っていく必要があるのかどうか、自由に話して終わり、でいいのか
- ・美術史、学術書の知識は生徒が受け入れない感じがした。生徒の方から深く掘り下げたい人が出てくる。全員が同じものに興味を持つ必要はない。先生から説明をするよりは生徒の第一印象を大切にすべきだ。絵を解説すること、知識を求めると鑑賞が続かない、息苦しい、おもしろくなくなる。
- ・抽象絵画でも歴史背景などを考えなければいけない
- ・子ども向けの鑑賞プログラムを作っている。歴史的背景などをクイズにするなどしてい

るが、言葉をなるべく使わないように心がけている。抽象作品については目で見て話し合い物語を作っていくことが大切のように考えている。文字説明については「読みたい人が読めばいいよ」と伝えている、クイズ式でめくらないと正解が出てこない、知りたくなったら声をかけるなどの方法を取り入れている。作品によってケースバイケースで知識の提示を考えている。大人であっても情報や知識を自分のペースで取り入れることができる提供の仕方をするべきだ。知識を答えとしてすべて伝えると鑑賞がその場で終わっていくのでバランスが大切。

- ・ 歴史背景、作者情報を知ると見方が変わる。それを知らないで見ても楽しいが、それを知ってからみるとより豊かに見える。子どもたちには最初から教えるわけではなく、ぼそっと伝えると子どもたちは喜ぶ。
- ・ 最初は子どもの自由な意見を集め、理解が深まり、それから知識を与えるようにしている
- ・ 相対評価から絶対評価になってきている。評価の明確な基準がなくなってきた。教師が明確なテーマを持って設定した場合、歴史や知識の理解が必要になっている。どちらかだけに偏ってもいけない。調和が必要。
- ・ 博物館では社会科の授業で学校が来る。目的は知識を得るため。プログラムの工夫の必要はあまりない。やり方そのものの開発については遅れている。単純なやり方が多かった。美術館では鑑賞教育とは美術史の勉強ではない。アメリカの鑑賞プログラムなどは子どもの内的なものを触発するためのものとして割り切られている。知識を得ることとは目的が異なっている。鑑賞は勉強ではない。子どもの鑑賞をむりやりある方向に向かわせてまとめることは難しい。背景や作者を教えるのはそれが答えであると教えることのようにも感じられる。鑑賞については背景や作者から切り離して考えるべきではないだろうか。学校での評価については鑑賞では相容れないものがあり難しい。変な方向に向かうのではないか。
- ・ 私は作家活動をしている。作品を作る人と評価は一致していないことが多い。具象を描いているつもりなのに抽象絵画と紹介されたことがある。解説と絵が一致しているかどうか疑わしい。描かれたものすべてを分析するのは難しい。(作家としては)心を揺さぶられるために美術館にでかける。歴史的な背景などはまったく気にかけない。作家の気持ちを想像している。
- ・ 子どもが作品について話をすることは学力とは違うレベルとして捉えられてしまう傾向がある。学力も美術に対しての知識、理解なのか、生き方に関するものなのかさまざまに捕らえ方がある。知識が選考して見方を狭めることがある。題名を隠さずに作品を見たらどうだろうか。タイトル(知識)によって見えなくなるものもあるのではないか。知識が必要ではないという意味ではない。目的によってさまざまなプログラムが必要である。

## 2.本物の価値

- ・ 美術鑑賞の授業は本物がなければ不可能なことなのか？つまり美術館から離れた学校は鑑賞の機会がないのか。
- ・ インターネットによる鑑賞で今までよりはきれいなものが見えるようになった。
- ・ 出張授業をしている。学校での鑑賞は図版が小さくても可能。美術館の出版物を利用すれば本物に近いものを見ることができる。そのこどもが大きくなって来館するきっかけになってもらえればよい。中学校の授業で美術館に行くことは難しい。校外学習を設定しなければならない。こどもが美術館で確認したい！と思わせるような工夫が必要。
- ・ 最終的には大人になって本物を見に来ればよい。出張美術館（作品を学校に持って出かける）が人気。遠方の学校には美術館から学校へでかけている。
- ・ 本物を見せればすべてが解決するのか。鑑賞の授業では子どもたちが学校から美術館にきて感動するのかわか分からない。こどもたちにどのように作品を鑑賞すればよいのかを探し出してもらうこと、は知識なのか。どのようなアプローチをすれば子どもたちが絵から学び話すようになるのだろうか。
- ・ 本やビデオで鑑賞授業を行っている。本物と複製画のどちらを見せるか悩んでいる。
- ・ 本物でなくても鑑賞はできる。プロジェクターを使っている。ポスターや器の鑑賞もしている。CD-ROM で授業をした。美術館に複製を作ってもらった。複製でも十分鑑賞を楽しむことができた。こどもたちにさまざまなスタイルで鑑賞してもらった結果、美術館にいきたい、ほかの作品も見たいという意見が出た。複写であってもやり方によっては鑑賞が十分可能だ。
- ・ 美術館のやりかたと学校のやりかたの違い。見ることへの準備ができていないとこどもたち自身が主体的に見ることを行えない。それを、美術館で対応することはほとんど不可能。美術館で本物を見たときに感動するような準備をさせるのは先生。近くの作家の作品を借用してみせるなど作品鑑賞に慣れさせる必要がある。
- ・ 市に美術館がない。移動美術展があるのでこどもをつれていった。ほかの学校の生徒よりもよく作品を見る。事前授業を行っていたためこどもの関心が強かった。
- ・ こどもに関心を持たせる手立て。こどもが主体的に学ぶことができる鑑賞とは。
- ・ 子どもたちの鑑賞については理解を深めるなどの目的があるが継続性がない。大人になってどれだけ主体的に美術館にでかけることができるのか。どうすれば美術館が親しめるものになっていくのか。

### 3.鑑賞の楽しさとは

- ・ 絵を見て楽しむとはどのような楽しみなのか
- ・ 美術館には来なくてもいいが、美術館が不要だとは思ってほしくない。美術館があることの誇り。美術館に価値を見出すようになってほしい。成果がでるのはまだ後。美術館を楽しんで見てもらえているのかということには不安。ちいさなきっかけのひとつ。「美術の授業が嫌いだったので美術館にはいかない」などの声もある。
- ・ 「楽しさ」「感動」「発見」などの「たのしさ」が美術鑑賞には必要。鑑賞で「楽しい」

と思うのはいつなのか。

- ・ 発見があり、おもしろい、自分が投影されることで別の楽しみができる。美術が「分かる」ことを排除すればおもしろいと感じられる。見る目ができることによって作家の人生などに入り込むことができるのではないか。
- ・ こどもが発見する喜び。気づく喜びをプログラム開発では必要とされているのではないか。
- ・ ワークショップを学校と美術館の連携で行う。親子、祖父母と子のワークショップ。経済的問題などが生じている。
- ・ 学校とのコラボレーションによって新しいものがみえる
- ・ 作家に作品を借りて授業を行った。作家から触ってよい、と言われ、本物の持つ力を実感。学校が来館のきっかけを作ることでもできる。授業としての鑑賞と学校と離れて美術館での鑑賞では大きく異なる。作品をどう見るのかも含めてとりあげる。
- ・ 見る切り口が分からないまま美術館を訪れる。学校で駆け抜けるように移動してしまう。出会い方がないと美術館訪問の機会が無駄になってしまう。鑑賞に来た、とは言い難い。ありきたりな感想を提出する、などでは美術館が苦痛になってしまう。
- ・ 教科書の図版をもとに問題と答えを作る、というテストを行った。おもしろいものでてくる。作品をじっくりと目で見る訓練になる。
- ・ こどもがどのように見るのかは、その人の生き方、かかわっている。
- ・ 将来こどもたちが美術館に来るための種を蒔いていると考える。入場者数が少ない。教員からしてみると美術館の敷居が高いように感じられる。美術館のコンセプトが学校、こどもたちの見たいものと一致しないこともある。美術館のテーマを学校の授業に取り入れ、先取り授業を行った。評価の問題が出てしまう。「楽しい」「おもしろい」をどう伝えて行くのか、こどもたちがどのような作品に関心をもっているのかを知る必要がある。現代美術の方がこどもたちに受け入れられている。自由に見ることのできる作品は子どもたちがはいいやすい。
- ・ 中学生は忙しい。鑑賞はなかなかできない現状。こどもには中学3年生になれば美術が自己表現のものであることを伝える。こどもにはある程度の枠を与えたり、ビデオを見せたりして作品作りに取り入れさせた。その程度しか鑑賞をさせることができない。大人になれば鑑賞の大切さがわかってくるのか？現状では塾などでこどもの時間が少ないのでアプローチが必要。

#### ○まとめ

今日は鑑賞とは何なのかについて議論をすすめてきました。

今日の課題：《水鏡》の鑑賞プログラム作り。どのようにこどもたちに読み解かせるかを考えたい。授業案を考える。どのようなねらいで作品を鑑賞させたいのか。